

◆藤森庄吉 選

《はじめは根問い》

念の為、「滑稽」って何でしたっけ。その根（ね）を問いましょう。会報の一月号の「滑稽俳句論壇」に、河村正浩先生の滑稽の定義があり、大意として『「滑稽」をいかに定義するのは人それぞれであろう。「俳諧味」が最も妥当のように思う』などと締め括られていた。人それぞれならば…、と私も筆を執らせて頂いた。私が思う「滑稽」にかなう「滑稽句」を、幾つか並べることで、私の「滑稽」をお示ししたい。作品が示す「滑稽」ということで。

大三十日愚なり元旦猶愚也

正岡子規

いやあ、私なんぞ、本当に浮世の厳粛な気分とはかけ離れて、ぐだぐだと過ごして、気がついたらお正月だった、という年末年始の何と多かったことか。「諧謔」というより自虐に近い。

今年はと思ふことなきにしもあらず

子規

そうそう、忘れていました。この句がありました。
有言実行なんて大それたこと。実現すれば、新年に立てた目標を達成などと、後で何とでも言えますから。このくらい、ぬらりと心を定めていく軽さも大事かと。

寒からう痒からう人に逢ひたからう

子規

天然痘なんて怖い病気だなあ。どうせ、寒い痒いの、我が儘言いそうだけど、友達なんだから、行ってやりたい。行ってやるよ。重い病気なら、「からう・からう・からう」と言ってやろう。

叩かれて昼の蚊を吐く木魚かな

夏目漱石

これ、知る人ぞ知る、知名度の高い句と思う。ちょっと、ぼんやりした風貌の僧侶の読経。ぼくぼく、ぼおく、ぼお〜く、ぼお〜く。聞いているうちに眠くなる。お経をあげている御本人も眠くなる。だれの目にもとまらずに、木魚の口から蚊がふらふらと飛んで出る。見ているのはご本尊の仏さまだけか。この

くらいのんびりしている方が、人の心が整うような気がする。漱石の句は、もつともっと挙げたいが、きりがなかろう。

《滑稽の細道》

細道といえば、松尾芭蕉。漱石は享年四十九歳、芭蕉の享年は、インターネットで検索すると、享年不詳、五十歳、五十一歳といろいろあり、一体どれなのか、何とかして欲しいネットの情報。

私は六十六歳なので、翁とか文豪とか言っても、お二人とも、私より十五歳もお若い。ここから先は、すべて松尾芭蕉の句。

暑き日を海に入れたり最上川 松尾芭蕉

おお、おお、暑い、暑い。夏の太陽が海に沈んで、「じゅっ」といったような。

あの中に蒔絵書たし宿の月

手は届きゃしないよお、だけど、何か書いてやれ。

いなづまやかほのところが薄の穂

色んな見立てが。遠くの雷じゃ恐くない。

菊の香やならには古き仏道

あっ、いけね。「何やら古き」と書いた積もりが。

此道や行人なしに秋の暮れ

秋の暮はさみしいもんだ。お、この道、だれもいない。さっきからずっと秋の暮。さっきからずっと、だれとも行き交わない。だれもいない道か。いや、私がいるじゃないか、私が行くじゃないか。いないけどいる。いないけどいる私を詠んでいる私がいる。それに気がついている私がいる。不思議な物思い。秋らしいやね。

夏草や ^{つはものども}兵共がゆめの跡

随分と茂ったものだなあ。草いきれが凄い凄い、そして暑い。ええ、ここで合戦があったとか。いやあ、草に寝そべって昼寝でもしていると、「攻めろおー」、だの「引けえー」だの、言われて、夢から覚めて、右往左往か。どんな夢見てたか忘れちゃったんだろうな。(え、そっちの夢だったの?)

山路来て何やらゆかしすみれ草

山道は辛い、疝気も、痔も辛い。やっどこさっどこ、ひと足ひと足、足も痛い。ふらふらだ、さっきから地べたの近くで、ちらちら見えるの、何だ。おお、すみれか。小さく咲いて、こっちを笑って見てるじゃないか。でも、鬱陶しくはないな、悪口も言わない。この辺さっきからすみれだらけ。こっちは辛いばかりだが、何やら、何だろ、そうか、すみれはすみれで、勝手に咲いているか。悔しいけど、何だか、ゆかしいんだね。

こじつけこじつけ、芭蕉さんの句で遊ばせて貰った。俳句が滑稽なんじゃなくて、これを詠んだ人に何やら、俳諧味があったらという、辻褄合せ。筆者の思い込みによる「ボクの細道」。

井の中を楽しんで居る蛙かな

荘吉

この句はどうですか。